HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域言語学的観点から見たツングース諸語の定動詞直説法の時制体系
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 12, 147-166
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84898
Type	bulletin (article)
File Information	11_Baek.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 12: 147-166（日本北方言語学会 2022）

地域言語学的観点から見たツングース諸語の定動詞直説法の時制体系[1]

白　尚 燁
（室蘭工業大学）

キーワード：地域言語学、ツングース諸語、定動詞直説法、時制体系、言語接触

1. はじめに

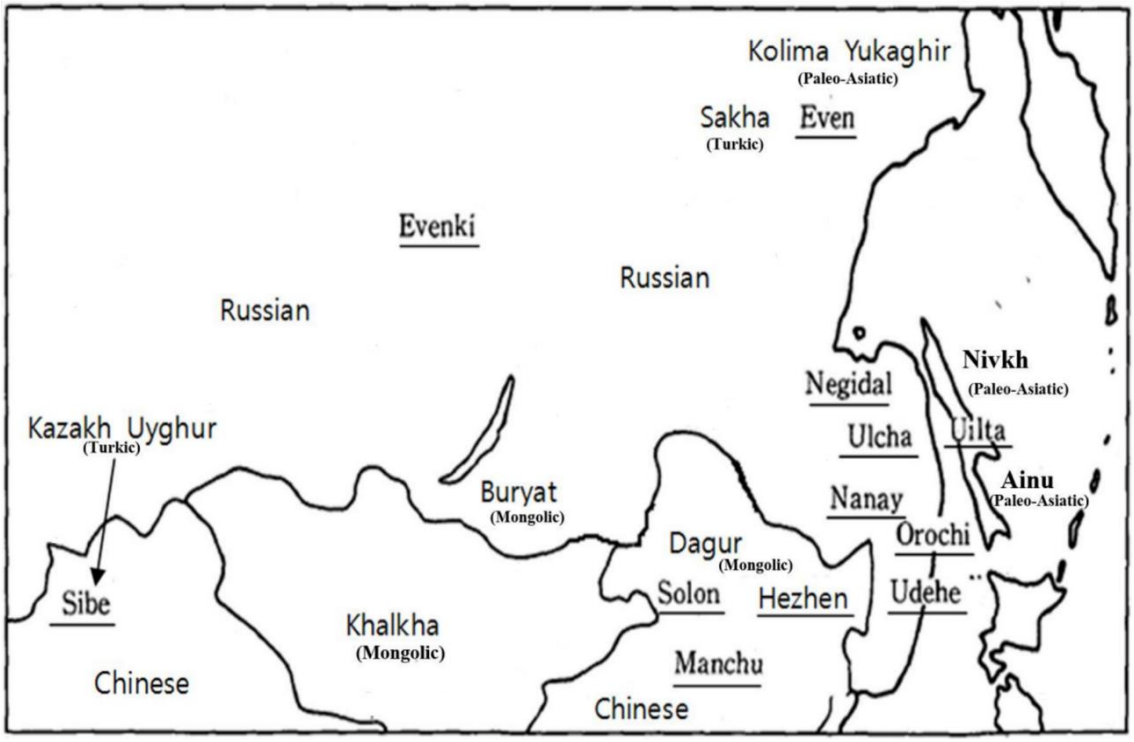

図 1. ツングース諸語（下線標示）と周辺言語の分布（Tsumagari 1997 に基づき、筆者改変）

ツングース諸語は、上記の図 1 で示すように、ロシア（東シベリア、アムール川流域、沿海州、サハリン）と中国（東北地方、新疆ウイグル自治区）にまたがって分布する同系の言語群を指す。このようにロシア領と中国領の広い範囲にかけて話されるツングース諸語は、ユカギール語、チュルク諸語、モンゴル諸語、ニヴフ語、アイヌ語、ロシア語、中国語等、系統関係が不明または異なる多くの言語と隣接していることから、言語接触の可能性が指摘されてきた。

[1] 本稿は、日本北方言語学会第 4 回兼国際シンポジウム（2021 年 11 月 6-7 日、北海道立北方民族博物館（網走市）＋ オンライン開催）で行った筆者による発表「地域言語学的観点からツングース諸語の定動詞直説法の時制体系」に修正・加筆を行ったものである。なお、本研究は JSPS 科研費（課題番号 19K23066, 21K12975, 21H04346）により、助成を受けたものである。

そこで、本研究はツングース諸語における定動詞直説法の時制体系がツングース諸語の地理的分布によって異なることを示し、ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系の違いとツングース諸語の地理的分布が相関していることと、同現象が各ツングース諸語の周辺言語とも類似していることを示し、言語接触の可能性を提起することを目的とする。

ツングース諸語における動詞分類

表 1. 統語機能に基づく定動詞と形動詞の違い

	名詞的機能	連体的機能	述語的機能
定動詞	-	-	+
形動詞	+	+	+

ツングース諸語の動詞は、大きく定動詞（finite verb）、形動詞（participle verb）、副動詞（converb）の 3 つに分類できるが、そのうち、主に文の述語として機能する動詞は定動詞と形動詞である。これらの 2 つの動詞形式は、統語機能によって区別される。定動詞は、文を終止させる述語として用いられる述語的機能（predicative function）のみ有しているが、形動詞は述語的機能に加え、名詞類を修飾する連体的機能（adnominal function）、名詞句を構成して格標識を伴う名詞的機能（nominal function）も見られる（表 1 参照）。定動詞と形動詞は、両方とも述語的機能を持っているため、時制との関連性が考えられるが、本稿では定動詞に焦点を当てる。ツングース諸語の定動詞には、直説法、命令法、願望法（希求法）、仮定法があるが、本稿では定動詞カテゴリーのうちもっとも時制との関連性が深い直説法（indicative mood）に注目する。

2. ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系

第 2 節では、各ツングース語における定動詞直説法の時制体系を概観する。本稿におけるツングース諸語の系統的分類は、ツングース諸語の音韻対応と文法特徴に基づいた Ikegami（1974）にしたがう（下記の図 2 参照）。但し、ホジェン語に関しては、風間（1996）による。また、満洲語の方言として見なされるシベ語（Sb）も研究対象とする。

第Ⅰ群：エウェンキー語（Ek）、エウェン語（E）、ネギダル語（N）、ソロン語（S）
第Ⅱ群：ウデヘ語（U）、オロチ語（Oc）、ホジェン語（Hz）
第Ⅲ群：ナーナイ語（Nn）、ウルチャ語（Ol）、ウイルタ語（Ut）
第Ⅳ群：満洲語（M）

図 2. ツングース諸語の系統的分類（Ikegami 1974）

研究方法

ツングース諸語と周辺言語に関する先行研究に基づき、各言語における定動詞直説法の時制体系について検討する。本稿の考察に当たり、以下の事項を断っておく。

・本稿における定動詞か形動詞かの判断は、共時的な観点から見て、上記の表 1 の 3 つの統語機能のうち、述語的機能のみもつ動詞を定動詞と見なす。但し、同起源の同一動詞屈折形式が共時的に同じ形で定動詞としても、形動詞としても用いられる場合は、定動詞として見なさない。また、否定動詞 *ə-* と共に否定構造を構成するだけで、時制標識として機能しない形式（**-rA*）に関しても、定動詞直説法形と同一形式であっても、定動詞として扱わない。

・本稿では、共時的な観点から見て、単一定動詞直説法形式として分類される動詞屈折形式に注目する。

・本稿において、時制の観点からの分類が容易ではないまたは確定されていない定動詞完了形式（2.4.1. 満洲語：*-hAbi~-kAbi*, 2.4.2. シベ語：*-Xei*）は考察の対象としない。

・Ikegami（2001（1992））は、定動詞直説法がアオリスト語尾 **-rA* と直説法形成要素 **-n* が結合したものであるという仮説を示した。本来なら、**-n* を含む定動詞直説法形式をもって考察を行わなければならないが、定動詞直説法のすべての時制に **-n* が用いられたのか、確かではないことと、先行研究によっては、**-n* を動詞形式に含める記述と **-n* を動詞形式の直後に付加される人称接辞の一部と見なす記述が混在している。また、人称によっては、**-n* の痕跡が見られない場合もある。そのため、本稿では **-n* を取り除いた動詞形式（表 2, 4, 5 で該当する動詞形式は下線表示）に限定して検討する。但し、通時的変化により、定動詞屈折形式 **-rA* の痕跡が見られない満洲語の *-mbi* とシベ語の *-mi* は、例外とする。

・ツングース諸語における定動詞直説法形 **-rA*（と **-rA* を含む形式）は、動詞語幹の末尾の子音と動詞タイプ（動的動詞、変化動詞、状態動詞）によって、*-rA~-lA~-tA~-A~-nA~-dA* のような子音交替が見られたり、人称によって、ゼロ形（表 2, 4, 5 参照）で現れたりすることがあるが、本稿では参照した各言語に関する先行研究で提示された定動詞直説法の代表形を用いて考察を行う。なお、本稿における大文字は動詞語幹の子音と母音のタイプにより、後続する子音と母音の形が交替する子音と母音同化現象の代表形を表す。

2.1. 第 I 群ツングース諸語

第 I 群ツングース諸語においては、ロシアの東シベリア地域に分布するエウェンキー語（文語）[2]、エウェン語、アムール川流域北部のネギダル語、中国東北地方のソロン語に注目する（個々の言語の分布地域に関しては図 1 参照）。表 2 は、これらの第 I 群ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系を示したものである。

[2] ツングース諸語のうち、最も広い範囲にわたって分布するエウェンキー語には、アムール川流域に分布する東エウェンキー語、サハリン島に話されるサハリンエウェンキー語と中国領に分布するオロチョンエウェンキー語、オルグヤエウェンキー語もある。これらのエウェンキー方言における定動詞直説法の時制体系について、検討しなければならない。これに関しては、今後の課題とする。

表 2. 第 I 群ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系[3]
（Nedjalkov 1997, Malchukov 1995, Kolesnikova and Konstantinova 1968, 胡・朝克 1986 に基づき、筆者作成: 該当する動詞形式は下線表示）

	エウェンキー語（文語）				エウェン語		ネギダル語		ソロン語
	現在	非未来	未来 1	未来 2	非未来	未来	非未来	未来	非過去
1SG	-jA-m	-ø-m	-jA-m	-jAl-i-m	-(r)A-m	-jI-m	-ø-m	-jA-m	-ø-mI
2SG	-jA-nni	-ø-nni	-jA-nni	-jAl-i-nni	-(A)-nrI	-jI-nrI	-ø-s(I)	-jA-s	-ø-ndI
3SG	-jArA-n	-rA-n	-jA-n	-jAllA-n	-(r)-n(I)	-jI-n	-jA-n	-jA-n	-rA-n
1PL.EXC	-jArA-v	-rA-v	-jArA-v	-jAllA-v	-(r)-U	-jI-U	-jA-wUn	-jA-wUn	-ø-mUn
1PL.INCL	-jArA-p	-rA-p	-jA-p	-jAllA-p	-(r)A-p	-jI-p	-jA-p	-jA-p	-ø-ttI
2PL	-jArA-s	-rA-s	-jA-s	-jAllA-s	-(A)-s	-jI-s	-jA-sUn	-jA-sUn	-ø-šUn
3PL	-jArA[-ø]	-rA[-ø]	-jArA[-ø]	-jAllA[-ø]	-(r)	-jI-r	-jA[-ø]	-jA-tIn	-rA-n

2.1.1. エウェンキー語

表 3. エウェンキー語の定動詞直説法の時制体系と -rA の定義

Nedjalkov (1997)			Bulatova and Grenoble (1999)		
過去	現在	未来	過去	現在	未来
-rA	-jArA (fully grammaticalized) -rA (下記の図 3 の b, c の場合)	-jA, -jAllA	-rA	-jA-rA (IMPF -jA+ -rA)	-jAA, -jAl-lA (< IMPF -jA + INC -l + -rA)
-rA: non-future tense marker			-rA: aorist		

Nedjalkov（1997: 236-237）は、定動詞形である *-rA* を「non-future（非未来形）」として定義した上で、*-rA* が非完了アスペクト（imperfective）を表す派生形式 *-jA* と結合した形式と推定される *-jArA* を「現在形」[4]として分類し、*-rA* が単独で使用される場合は、「過去形」に分類している。その上、*-rA* には a）近過去、b）長期間続いてきた状態の現在、c）現在習慣（習慣相 *-ŋna* とともに）、d）過去非完了のような様々な機能があると記している。一方、Bulatova and Grenoble（1999）は、*-rA* の不定または未定の性質を考慮してアオリストと定義し、形態論的分布により、現在、現在完了、未来の時制を示すことができると指摘している。しかし、筆者は *-rA* という形式が単独で用いられ、上記の 3 つの時制を表すのではないため、この記述には賛同しない立場である。そのため、本稿では Nedjalkov（1997）にし

[3] エウェンキー語の未来 2 は、Nedjalkov（1997）に、エウェン語の未来は、Malchukov（1995）に基づき、筆者加筆。

[4] *-jArA* は、ある出来事が現在の出来事であることをより明確にするため、非完了アスペクト（imperfective）を示す派生形式*-jA* が非未来形式*-rA* の直前に用いられると考えられることと、*-jArA* における 1 人称単数、2 人称単数、1 人称複数除外形、3 人称複数の体系が、未来 1 *-jA* の体系と同じであること（表 2 参照）から、同形式を時制体系の一部として扱うべきかに関して、筆者は疑問を持っている。そのため、本稿では *-jArA* を排除して考察を行う。

たがい、*-rA* を現在と過去を共に示し得る非未来時制形として見なす。また、これと対立する未来時制形式としては、*-ǰA*, *-ǰAllA*（<**-ǰA-l-rA*）がある。Nedjalkov（1997: 243-244）では、その使用頻度（*-ǰA*: 20%, *-ǰA-l-lA*: 0.1%）から見て、*-ǰA* を最も頻繁に用いられる未来形式として取り上げている。以上のことから、表 2 のとおり、エウェンキー語の定動詞直説法は非未来と未来の時制対立を成していると言える。

a) aoristic (a single perfective recent past action), with verbs of achievement, accomplishment and activity; →過去
b) present of prolonged state, with verbs of state (*saa-* 'know', *ajaw-* 'love', *ŋələ-* 'be afraid of', etc.); →現在
c) present habitual, with verbs having the habitual aspect marker *-ŋna*; →現在
d) past imperfective, with a few activity verbs →過去

図 3. 非未来形式*-rA*[5]の用法（Nedjalkov 1997: 237 に基づき、筆者整理）

2.1.2. エウェン語

エウェン語全般に関する記述である Malchukov（1995: 15-16）[6]では、エウェン語の*-rA* が付加される動詞の限界性（telicity）によって、現在（atelic verbs: 非限界動詞）と過去（telic verbs: 限界動詞）を表示する非未来形として分類している。エウェンキー語と同じく、進行アスペクトを表す派生形式 *-ǰ(I)*が *-rA* と結合し、現在時制を示す用例も確認できる。また、未来時制専用の定動詞直説法未来形 *-ǰI* が存在することもエウェンキー語と共通している。エウェン語（東方言）に関する Kim（2011: 86-88）でも、非未来と未来が対立する定動詞直説法の時制体系として記述している。

2.1.3. ネギダル語

ネギダル語には、エウェンキー語とエウェン語の *-rA* と音韻的に対応する定動詞直説法形式 *-jA*（エウェンキー語とエウェン語における *r-* は、ネギダル語において *j-*へ変化）が観察され、現在と過去の出来事を示すことができる。但し、Pevnov and Khasanova（2003: 263）によると、ネギダル語の *-jA* には、エウェンキー語とエウェン語に見られた非完了または進行アスペクトを表す派生接辞と *-rA* が結合する現象は見られないという。なお、ネギダル語にもエウェンキー語の定動詞直説法未来形と対応する *-ǰA* も確認できる[7]。

---

[5] Nedjalkov (1997: 239)では、過去時制の文で *-rA* が用いられる際、話者が目撃した最近の出来事（recent past actions witnessed by the speaker）を示すが、形動詞過去形 *-čA* が用いられる際には話者が目撃していない最近の出来事（recent past situations which were not witnessed by the speaker）を示すことを指摘し、証拠性との関連性についても触れている。

[6] Malchukov（1995: 15-16）では、*-ri* を直説法過去形として取り上げているが、同起源で同一形式が形動詞としても用いられるため、本稿における定動詞直説法の定義に基づき、対象としない。

[7] 形動詞未来形 *-ǰA(ŋAA)*は、屈折形式の一部が省略され、定動詞と同形の *-ǰA* として現れることもあるが、同形式はあくまでも *-ǰA(ŋAA)*に関連付けられるため、本稿ではそれぞれ別の形式として見なす。

2.1.4. ソロン語

中国領に分布するソロン語（海拉尔（ハイラル）方言）は、胡・朝克（1986: 64-66）で記述されているように、他の第Ⅰ群ツングース諸語と違って、*-rA* が現在と未来の出来事を示す非過去の時制形式として機能する。また、ソロン語で未来専用の定動詞直説法形式が欠如しているという点においても、他の第Ⅰ群ツングース諸語と異なる。一方、過去専用の定動詞直説法形式が見られない点においては、ロシア領の第Ⅰ群ツングース諸語と共通している。ソロン語で過去の出来事を表す際には、形動詞の過去形が用いられる。

2.2. 第Ⅱ群ツングース諸語

表 4. 第Ⅱ群ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系
（風間 2010a, 李 2006, 2014: 該当する動詞形式は下線表示、［　］筆者追記）

	ウデヘ語			ホジェン語
	過去	現在	未来	非過去
1SG	-A(ʔ)-i	-ø-mi	-ǰA-mi	形動詞
2SG	-A(ʔ)-i	-ø-i	-ǰA-i	形動詞
3SG	-(ʔ)A[-ø]	形動詞	-ǰA[-ø]	-rə/rən
1PL.EXC	-A(ʔ)-u	-ø-u	-ǰA-u	形動詞
1PL.INCL	-(ʔ)A-ti	-ø-fi	-ǰA-fi	形動詞
2PL	-A(ʔ)-u	-ø-u	-ǰA-u	形動詞
3PL	-(ʔ)A[-ø]	形動詞	-ǰA[-l]	-rə/rən

次に、第Ⅱ群に属するウデヘ語とホジェン語について検討する。オロチ語に関しては、定動詞直説法形式が存在せず、形動詞のみ見られるため、本稿では研究対象としない。下記の表 4 は、ウデヘ語（ビキン方言）とホジェン語（キーレン方言）における定動詞直説法の時制体系を整理したものである。

2.2.1. ウデヘ語

ウデヘ語には、第Ⅰ群のツングース諸語と異なり、過去（*-A(ʔ)*[8]/*-gə*[9] < **-kA*）、現在[10]（*-ø* < **-rA*）、未来（*-ǰA*）、それぞれの定動詞直説法形式が観察される（風間 2010a にもとづく）。このうち、現在形と未来形は、第Ⅰ群のロシア領ツングース諸語に見られる定動詞直説法形式と対応関係が想定できる。一方、過去形[11]に関しては、対応する定動詞直説法形式がナー

[8] *ʔ*は、声門閉鎖音で、ウデヘ語の定動詞直説法過去形において、緊喉母音の異形態があることを示す。
[9] 動詞語幹が *-i*, *-u* で終わる動詞は、定動詞過去形 *-gə* が付加される。
[10] 風間（2010a: 218）では、下記の用例とともに、ウデヘ語の定動詞現在形が近未来の行為を表すこともできると言及している: *ələə budə-ø-mi* (soon die-PRS-1SG)「もうすぐ私は死ぬ」。
[11] Girfanova（2002: 30-31）によると、ウデヘ語には過去時制が 2 つ見られ、過去時制 2（本稿における定動詞過去形に該当）は直接体験したまたは確信のある出来事（either a witness of the events or is absolutely sure in the source of information）を示すのに用いられ、過去時制 1（本稿における形動詞過去形に該当）は過去に起こったかもしれない出来事の漠然性（probability of situation which might have taken place in the past）を示

ナイ語、ウイルタ語、満洲語、シベ語にも確認できる。

2.2.2. ホジェン語

第Ⅱ群ツングース諸語のうち、唯一中国領（東北地方）に分布するホジェン語（キーレン方言）に関する先行研究である李（2006: 63, 2014: 112）によると、ホジェン語の定動詞直説法には、非過去形と 3 人称接辞が結合した *-rə/rən*（< **-rA* + *-n*）しかない、1 人称と 2 人称の場合は形動詞が用いられる[12]と記述されている。また、ロシア領のツングース諸語に共通して見られた定動詞の未来形は確認できない。

2.3. 第Ⅲ群ツングース諸語

表 5. 第Ⅲ群ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系

（風間 2004, 2010b, 風間 2010c, Ikegami 2001（1959）, 池上 2001 に基づき、筆者作成: 該当する動詞形式は下線表示、［　］筆者追記）

	ナーナイ語			ウルチャ語		ウイルタ語			
	過去	現在	未来	現在	未来	過去	現在	未来 1	未来 2
1SG	-kA-ı	-rAm-bı	-jAAm-bı	-rAm-bI	-rIlAm-bI (=mA)	-	+rA-mi-gA	+rilA-mi	+rAŋ-i-i
2SG	-kA-sı	-rA-čı	-jAA-čı	-rA-tI	-rIlA-tI (=mA)	-	+rA-si-gA	+rilA-si	+rAŋA-si-i
3SG	-kA[-ø]	-rA[-ø]	-jArAA[-ø]	-rA-ø	-rIlA-ø (=mA)	-tA-A	+rA-kkA-ø	+rillA-ø	+rAŋA-ø-i
1PL	-kA-pO	-rA-pO	-jAA-pO	-rA-mU	-rIlA-pU (=mA)	-	+rA-pu-gA	+rilA-pu	+rAŋA-pu-i
2PL	-kA-sO	-rA-sO	-jAA-sO	-rA-sU	-rIlA-sU (=mA)	-	+rA-su-gA	+rilA-su	+rAŋA-su-i
3PL	-kA-l	-rA-l	-jArAA-l	-rA-(l)	-rIlA-(l) (=mA)	-tA-A-(l)	+rA-kkA-(l)	+rillA-(l)	+rAŋA-(l)

表 5 は、第Ⅲ群に属するアムール川流域に分布するナーナイ語（ナイヒン方言）、ウルチャ語とサハリン島で話されるウイルタ語における定動詞直説法の時制体系をまとめたものである[13]。

2.3.1. ウルチャ語

ウルチャ語の定動詞直説法において、現在（*-rA*）と未来（*-rIlA*）は確認できるが、過去時制の形式は欠如している（風間 2010c: 127 参照）。現在は、上記のツングース諸語で触れた **-rA* と音韻的に対応する形式であるが、定動詞直説法未来に関しては、上記のツングース諸語で確認できた形式は見られず、後述のウイルタ語の未来 1（*-rilA*）と対応する形式が観察できる[14]。

すと述べている。なお、風間（2010a: 218-219）でもウデヘ語の定動詞直説法が「話し手自身が経験したり目撃した場合にのみ用いられる」ため、証拠性と関係する形式であると指摘している。

[12] 但し、李（2014: 112）では、定動詞直説法には一部の話者に定動詞直説法の 1 人称単数非過去形（v-*ø*-*mi*）の用例がわずかながら、確認できると指摘している。

[13] ウルチャ語、ウイルタ語に関しては、定動詞直説法の時制体系に方言差はないと考えられる。

[14] 風間（2010c: 127）では、ウデヘ語と同じく、ウルチャ語の定動詞直説法も話し手が直接体験したことについて用いられることを指摘し、証拠性と関係する形式であると述べている。

2.3.2. ナーナイ語

次に、ナーナイ語の場合は、過去（*-kA*）、現在（*-rA*）、未来（*-jAA*）のすべての時制において定動詞直説法の形式が見られる[15]（風間 2010b にもとづく）。ナーナイ語の定動詞直説法現在形と未来形は、エウェンキー語、エウェン語、ネギダル語に見られた形式と対応関係が想定できるが、過去形に関しては、ウデヘ語、ウイルタ語と共通している。

2.3.3. ウイルタ語

サハリンで話されるウイルタ語でも、ナーナイ語と同じく、すべての時制（現在（*-rA*）、過去（*-tA*）、未来 1（*-rilA*）、未来 2（*-rAŋA*））において定動詞直説法形式が確認できる[16]。現在と過去を示す定動詞直説法形式は、他のツングース諸語と音韻的に対応する形式が用いられる。但し、未来時制の形式が 2 つ存在する点においては、ナーナイ語、ウルチャ語と異なっている。

2.4. 第Ⅳ群ツングース諸語

表 6. 第Ⅳ群ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系[17]

（津曲 2002, 朴 2017, 児倉 2018 に基づき、時制の観点から筆者作成）

満洲語	シベ語		
非過去	過去	現在	未来
-mbi	-mi	-mi	-mi
	-maχei	-maχei	(-maχei)

本節では、満洲語と新疆・ウイグル自治区で話されるシベ語における定動詞直説法の時制体系について検討する。上記の表 6 は、満洲語とシベ語における定動詞直説法の時制体系を整理したものである。

---

[15] 風間（2010b: 240-241）では、ナーナイ語の定動詞直説法においても、「もっぱら話し手がその出来事を実際に目撃した、もしくは体験した場合に用いられる。そのできごと（もしくはその結果）を目撃したまさにその場面で、驚きなどの感情を伴っている場合に、直説法の形式が用いられることがある」と述べ、証拠性との関連性を指摘している。

[16] 山田（2013）では、現在形が話し手によって現在検証ないし目撃されている事実を表わし、過去形は話し手が体験した出来事を示すと記述していることから、ウイルタ語の定動詞直説法形式も、他の隣接するツングース諸語と同じく、証拠性との関連性が考えられる。

[17] 津曲（2002）で、*-mbi* を現在の行動や状態、習慣、予定などを表す「現在形」として定義しているが、時制の観点や関連用例から見て現在または未来の出来事を示すことと朴（2017）による時制体系分析に基づき、「非過去」として分類した。また、他にも満洲語の定動詞直説法形式として、完了形*-hAbi*～*-kAbi* が見られ、津曲（2002: 56）では「過去の出来事を強調的に説明したり、その結果が現在まで残っていることを示す」形式であると述べている。英語の現在完了を連想させる*-hAbi*～*-kAbi* は、ロシア領の第II群と第III群のツングース諸語で確認できる過去形**-kA* と対応関係が想定できる*-hA*～*-kA* とコピュラ動詞 *bi-*が結合した定動詞完了形式で、上記の用法から見て、時制の観点からの分類が容易ではないため、本稿では扱わないこととする。なお、*-mbihe* に関しては、与位格を伴う用法があることから連体形（形動詞）として分類（Tsumagari 2002）。一方、シベ語に関して、児倉（2018: 125）は、シベ語の動詞体系を非現実の、個別具体的ではない事態（irrealis）を示す定動詞直説法形 *-mi*（形動詞形: *-re*）と、現実の個別具体的事態（realis）を表す形式としては、完了的事態の定動詞直説法形 *-Xei*（形動詞形: *-Xe*）と非完了的事態の定動詞直説法形*-maχei*（形動詞形: *-maχe*）のようにムード・アスペクトの体系として分類している。表 6 は、同記述に基づき、時制の観点から分析した結果である。

2.4.1. 満洲語

満洲語の定動詞直説法には、現在または未来の出来事を示すことができる非過去形式*-mbi*が見られる[18]。定動詞直説法未来時制に関しては、他の中国領ツングース諸語と同じく、未来専用の形式は存在しない。

2.4.2. シベ語

新疆・ウイグル自治区に分布する、満洲語の方言として見なされるシベ語においても、満洲語の *-mbi* と対応する *-mi* が定動詞直説法形式[19]として用いられ、李・仲（1986: 82）によると、同形式が現在と未来の出来事を示す非未来の標識として用いられるという。一方、児倉（2018: 152）は、*-mi* が「過去・現在・未来に関わらず具体的に実現していない、習慣や動作、発話時以降に生起する事態（事柄）」を表すことから、同形式が非過去の時制形式と分類することは適切ではないと述べている。また、シベ語には、他のツングース諸語と違って、動詞語幹の直後に付加され、進行中の出来事を示す非完了終止形 *-maχei*[20]が見られることも注目すべきである。この形式も、*-mi* と同じく、時制と関係なく発話時点で完結していない出来事を表すことができる[21]（児倉 2018 にもとづく）。*-maχei* は、他のツングース諸語に対応する形式が見られないため、その起源はまだ不明である。未来専用の定動詞直説法形式が見られない点においては、シベ語は他の中国領のツングース諸語と共通している。

2.5. ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系

以上、第Ⅰ群から第Ⅳ群のツングース諸語における定動詞直説法の時制体系を検討し、その結果を表 7 にまとめた。まず、エウェンキー語、エウェン語、ネギダル語のロシア北部に分布する第Ⅰ群ツングース諸語は、共通して非未来形と未来形の時制対立が観察される。次に、東ツングース諸語（ナーナイ語、ウイルタ語、ウデヘ語）に関しては、原則一つの時制に一つの定動詞形式が存在するが、ウルチャ語においては過去時制の形式が欠如している。最後に、南ツングース諸語（シベ語を除く）は、**-rA* と対応する形式が現在と未来を示

---

[18] 筆者は、満洲語の*-mbi*（シベ語の*-mi* も同様）が、直説法動詞形式*-rA*, 直説法形成要素*-n*, 1 人称単数人称接辞*-bi* が結合した形式に由来すると見ている。Kogura（2015）でも、類似した通時的考察（満洲語 *-mbi*, シベ語*-mi* < **-rAn-bi*）が見られる。但し、*-mbi* の起源に関しては、*-mbi* < *-me bi-*（CVB be）説（Ramstedt 1952, Avrorin 2000）、*-mbi* < *-n bi*（NMLZ be）説（Sinor 1949）、*-mbi* < *-n-bi*（NMLZ-1SG）説（Benzing 1955）のように諸説が存在するものの、明確な結論は出ていない状況である。また、池上（2001（1971）: 421-422）は他のツングース諸語の**-rA* が満洲語の形動詞語尾*-re* と対応する形式と述べている。筆者はこの見解に賛同する立場である。つまり、満洲語の定動詞直説法非過去形 *-mbi* は**-rA-n-bi*, 形動詞非過去形 *-re* は**-rA* に由来するという見方である。類似した現象は、定動詞完了形*-hAbi*~*-kAbi*（< 過去形**-kA* + *bi*）、形動詞過去形 *-hA*~*-kA*（< 過去形**-kA*）にも見られる。

[19] 他に、シベ語には主に具体的に実現した過去の出来事を表す定動詞完了形式として、*-Xei* が見られる。児倉（2018: 151）では、「-Xe=i（本稿における*-Xei*）のみは、発話時以降のある時点において終結している（と話し手が考える）事態を表すことができないため、過去というテンスを表すといえるかもしれない」と述べている。本稿では、*-Xei* に対する時制分類が確定されていないと見なし、考察の対象としない。

[20] 児倉（2007: 139）、久保 et al.（2011: 38）は、*-maχei* を「進行」を表す定動詞直説法（終止形）と記述しているが、本稿では、児倉（2018）に基づき、非完了終止形と称する。

[21] 但し、*-maχei* は基本的に未来の事態を表さないが、具体的に特定された時点で起こる個別具体的な事態である場合は、未来の出来事を表すことができる（児倉 2018: 130-133）。そのため、表 6, 7 の未来時制における *-maχei* は括弧表示。

し得る非過去形として用いられることが特徴である。シベ語においては、*-mi* が時制と関係なく用いられる点と定動詞直説法形式に非完了終止形 *-maχei*（この形式も時制と関係なく用いられる）が見られる点において、他の南ツングース諸語と異なっている。また、未来専用の定動詞直説法形式が存在しない点においては、すべての南ツングース諸語が一致している。

表 7. 地理的分布によるツングース諸語の定動詞直説法の時制体系
（各言語の略語は図 2 参照、対応する動詞形式は下線標示）

		過去	現在	未来	時制体系
北	Ek (I)	*-rA*		*-ǰA̰*, *-ǰAllA*	非未来・未来
	E (I)	*-rA*		*-ǰI*	非未来・未来
	N (I)[22]	*-jA*		*-ǰA̰*	非未来・未来
東	Ol (III)	-	*-rA*	*-rIlA*	現在・未来
	Nn (III)	*-kA*	*-rA*	*-ǰA̰A*	過去・現在・未来
	Oc (II)	定動詞直説法欠如			
	Ut (III)	*-tA*	*-rA*	*-rilA*, *-rAŋA*	過去・現在・未来
	U (II)	*-A*$^{(ʔ)}$	*-ø*	*-ǰA̰*	過去・現在・未来
南 1	S (I)	-	*-rA*		非過去
	Hz (II)	-	*-rə*		非過去
	M (IV)	-	*-mbi*		非過去
南 2	Sb (IV)	*-mi* *-maχei*	*-mi* *-maχei*	*-mi* *(-maχei)*	~~時制~~ 非完了終止形、~~時制~~

以上の考察結果に基づき、ツングース諸語の地理的分布（北／東／南 1／南 2）により、ツングース諸語の定動詞直説法の時制体系（北ツングース諸語（エウェンキー語、エウェン語、ネギダル語）：非未来・未来／東ツングース諸語（ナーナイ語、ウイルタ語、ウデヘ語）：過去・現在・未来／南ツングース諸語 1（ソロン語、ホジェン語、満洲語）：非過去、未来専用形式の欠如／南ツングース諸語 2（シベ語）：時制の欠如、非完了終止形の発達））が異なっていることから、ツングース諸語の地理的分布と定動詞直説法時制体系の違いは相関している可能性が考えられる。

3. 周辺言語の定動詞直説法の時制体系

第 2 節の結果を踏まえ、第 3 節ではツングース諸語の周辺言語における定動詞直説法の時制体系についても検討する。本節では、コリマ・ユカギール語、チュルク諸語、ニヴフ語、

[22] 厳密にいうと、ネギダル語はその分布地域から見て東ツングース諸語と分類されるべきだが、東ツングース諸語のうち、最も北部に話される点とエウェンキー語、エウェン語と隣接し、これらのツングース諸語と類似している文法現象が多く見られることから、本稿では北ツングース諸語として扱い、議論する。

モンゴル諸語、中国語の定動詞直説法形式に焦点を当てる。不完了体と完了体の対をなす動詞の使い分けによる時制・アスペクト表示のストラテジーを持つロシア語と動詞に付加される時制の形式が存在しないアイヌ語に関しては、本稿では扱わない。

3.1. コリマ・ユカギール語

表 8. コリマ・ユカギール語における定動詞直説法の時制体系
（他動詞の場合、Nagasaki 2011）

	非未来	未来
1SG	*-ø*	*-t-ø*
1PL	*-t'~-j~-i*	*-te-j~-t-i*
2SG	*-mek/-mik*	*-te-mek~-t-mek/-te-mik~-t-mik*
2PL	*-met*	*-te-met~-t-met*
3SG	*-m*	*-te-m~-t-u-m*
3PL	*-ŋaa/-ŋam*	*-ŋi-te-m*

コリマ・ユカギール語の定動詞直説法では、表 8 のように、非未来と未来の対立が見られ、時制体系に関しては、北ツングース諸語との類似性が見られる。

3.2. チュルク諸語[23]

チュルク諸語においては、ツングース諸語との接触の可能性がある東シベリア地域のサハ語と新疆・ウイグル自治区のウイグル語、カザフ語を検討する。ロシアの東シベリアに分布するサハ語における定動詞直説法には、5 つの動詞形式（近過去 *-TI*、遠過去 *-BIt*+ 所有型接辞、結果過去 *-BIt*+ コピュラ型接辞、現在 *-(E)r*、未来 *-(IE)x*）が見られるが、近過去を示す *-TI* 以外は、すべて形動詞としても用いられる。一方、中国の新疆・ウイグル自治区で話されるカザフ語とウイグル語には、表 9 のように、非過去と過去の対立[24]が見られ、未来専用の形式は存在しない。また、ウイグル語においては、動詞語幹に接続し、時制と関係なく、進行・継続を示す非完了終止形[25] *-maqta~-mäktä*（<* *-mAk* 名詞化接辞 + *-tA* 所格: Dwyer 2016: 200）が見られるのが特徴である。ウイグル語における進行・継続を示す非完了終止形の存在及びその形（*-maqta~-mäktä*）は、シベ語の非完了終止形（*-maχei*）とも類似性が考えられる。但し、ウイグル語の *-maqta~-mäktä* は、主に文章やスピーチなどで用いられる点と否定形や疑問形を持っていないのが一般的である点（武内 1991: 169, 菅原 2007: 65

[23] サハ語、カザフ語、ウイグル語には、不定未来を示す中立形式が見られるが、名詞句を修飾する連体修飾形としても用いられることから、本考察では対象としない（江畑 2020: 76, Geng & Li 1985: 69-70, 77, 竹内 1991: 189-191）。

[24] 但し、竹内（1991: 160-161）は、ウイグル語の終止形（本稿での定動詞直説法）を未完了と完了のアスペクト対立として説明しているが、ウイグル語における定動詞直説法は、非過去と過去の対立である見方が一般的であると考えられる。

[25] 同形式に対し、竹内（1991: 169）は「継続相」と、菅原（2007: 65）は「継続」を表す接尾辞と定義しているが、本稿では Dwyer（2016: 200）の定義（imperfective finite form）に従い、「非完了終止形」と称する。

参照）においては、シベ語の非完了終止形と異なっている。

表 9. 周辺チュルク諸語における定動詞直説法の時制体系
（Ebata 2011, 江畑 2020, 耿・李 1985, Hahn 1998, 赵・朱 1985, 新田 2015, Dwyer 2016 に基づき、時制の観点から筆者作成: 該当する動詞形式は下線標示）

	サハ語	カザフ語		ウイグル語		
	近過去	非過去	過去	非過去	過去	非完了終止形
1SG	-TI-m	-A-mIn	-dI-m	-A-mAn	-dI-m	-mAKtA-mAn
2SG	-TI-ŋ	-A-sIŋ	-dI-ŋ	-A-sAn	-dI-ŋ	-mAKtA-sAn
2SG.POL		-A-sIz	-dI-ŋIz	-A-sIz	-dI-ŋiz	-mAKtA-sIz
3SG	-TI-ø	-A-dI	-dI-ø	-A-du	-dI-ø	-mAKtA-du
1PL	-TI-BIt	-A-mIz	-dI-K	-A-miz	-dI-K	-mAKtA-miz
2PL	-TI-GIt	-A-sIŋdAr	-dI-ŋdAr	-A-sIlAr	-dI-ŋlAr	-mAKtA-sIlAr
2PL.POL		-A-sIzdAr	-dI-ŋIzdAr	-A-sIlAr	-dI-ŋizlAr	-mAKtA-sIlAr
3PL	-TI-LEr	-A-dI	-dI-ø	-A-du	-dI-ø	-mAKtA-du

3.3. ニヴフ語

ニヴフ語全般に関する記述 Gruzdeva（1998: 33）とアムール方言に関する記述 Nedjalkov and Otaina（2013: 2）によると、ニヴフ語の定動詞直説法には、非未来 *-ø* と未来 *-nə*（アムール方言、*-i*: 東サハリン方言）の時制対立が見られると述べられている。

3.4. モンゴル諸語

モンゴル諸語においては、ツングース諸語との接触の可能性があるブリヤート語、ダグール語、ハルハモンゴル語を中心に検討を行う。各言語の分布地域を見ると、ブリヤート語はロシア領、ハルハモンゴル語はモンゴル国、ダグール語は中国領に分布する。各言語の定動詞直説法形式の時制体系をまとめたのが表 10 である。まず、ブリヤート語は過去、現在、未来の定動詞直説法形式が見られる[26]。一方、モンゴル国のハルハモンゴル語と中国領に分布するダグール語、ホルチン方言は、共通して現在と未来の出来事を示し得る非過去形と過去の出来事を示す過去形が存在するが、未来時制専用の形式は見られない。

[26] 中国領で話されるブリヤート語の方言であるシネヘン・ブリヤート語に関する Yamakoshi（2011: 152-153）、山越（2018: 208）によると、シネヘン・ブリヤート語の定動詞直説法にも、ロシア領のブリヤート語と同じく、3 つの時制体系（過去形（*-b(A), -zʲee*）、現在形（*-nA*）、未来形（*-OOzʲA*））が見られるが、過去形と未来形は、物語または伝説等の古い文体に限られ、会話では未完了形動詞 *-AA* が過去、未来形動詞 *-xA* が未来を示すと記述されている。これ（未来の出来事は、未来形動詞によって示される）と類似している記述は、隣接しているハムニガンモンゴル語（定動詞直説法時制体系：過去形（*-bA*, *-lAA*, *-zi*）、現在形（*-nA*）、未来専用時制形は欠如）にも見られる（Janhunen 2005: 42-43, Yu 2011: 72-73 参照）。

表 10. 周辺モンゴル諸語における定動詞直説法の時制体系
（Poppe 1960, Skribnik 2003, Tsumagari 2003, 仲 1982, Svantesson 2003, 山越 2012, Todaeva 1984 に基づき、筆者作成: 該当する動詞形式は下線標示）

	ブリヤート語			ダグール語		
	過去	現在	未来	過去	非過去 1	非過去 2
1SG	-bA-b	-nA-b	-UUjA-b	-laa-bi	-n-bi	-bei-bi
2SG	-bA-š	-nA-š	-UUjA-š	-laa-š	-n-š	-bei-š
3SG	-bA-ø	-nA-ø	-UUjA-ø	-laa-ø	-n-ø	-bei-ø
1PL.EXC	-bA-bdi	-nA-bdi	-UUjA-bdi	-laa-baa	-n-baa	-bei-baa
1PL.INCL				-laa-daa	-n-daa	-bei-daa
2PL	-bA-t	-nA-t	-UUjA-t	-laa-taa	-n-taa	-bei-taa
3PL	-bA-(d)	-nA-(d)	-UUjA-(d)	-laa-(sul)	-n-(sul)	-bei-(sul)

	ハルハモンゴル語				ホルチンモンゴル語			
	過去 1	過去 2（体験）	過去 3（伝聞）	非過去	過去 1	過去 2	過去 3	非過去
1SG, 2SG, 3SG, 1PL, 2PL, 3PL	-b	-lAA	-zee	-n(AA)	-b(AA)	-lAA	-dz(ee)	-nAA

3.5. 中国語（普通話）

中国語には、時制による動詞の変化が見られないため、時制という文法カテゴリーを認めない見方（Chao 1968, Li and Thompson 1981, Sun 2006, Liu 2015）が一般的である。

4. おわりに

以上の考察結果に基づき、図 4 と図 5 を作成した。まず、ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系は、地理的分布により、北（エウェンキー語、エウェン語、ネギダル語: 非未来・未来）、東（ナーナイ語、ウデヘ語、ウイルタ語: 過去・現在・未来）、南 1（ソロン語、ホジェン語、満洲語: 非過去、未来専用時制の欠如）、南 2（シベ語: 時制の欠如、非完了終止形の発達）のように異なっていることが確認できた。また、ツングース諸語の周辺言語においても、北部（コリマ・ユカギール語: 非未来・未来）、中部（ブリヤート語: 過去・現在・未来）、南部 1（ダグール語、ハルハモンゴル語: 非過去、未来専用形式の欠如）、南部 2（中国語: 時制の欠如、ウイグル語：非完了終止形の発達）のように類似した傾向が見られることは興味深い。この結果を踏まえ、筆者は次の 2 つの可能性を提起する:

①ツングース諸語における定動詞直説法の時制体系が地理的分布によって異なるパターンが見られることから、ツングース諸語の地理的分布と定動詞直説法の時制体系が相関している可能性が考えられる。

②また、同現象は隣接している周辺言語との類似性が見られるため、言語接触による結果である可能性がある。

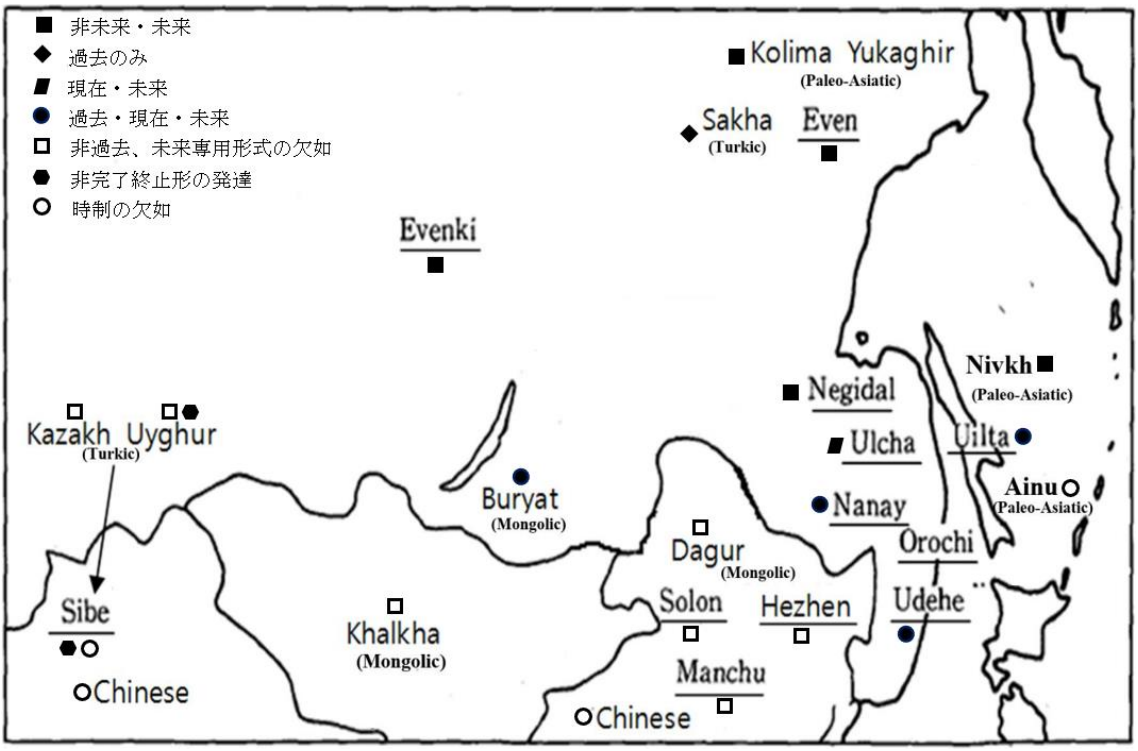

図 4. ツングース諸語と周辺言語における定動詞直説法の時制体系

		ツングース諸語	周辺言語
北	非未来・未来	Evenki, Even, Negidal	Kolyma Yukaghir Nivkh
東	過去・現在・未来	Nanay, Uilta, Udihe	Buryat
南 1	非過去、未来専用形式の欠如	Solon, Hezhen, Manchu	Dagur, Khalkha, Kazakh, Uyghur
南 2	時制の欠如 非完了終止形の発達	Sibe	Chinese Uyghur

図 5. 地理的分布によるツングース諸語と周辺言語における定動詞直説法の時制体系

但し、上記の 3 つのグループのツングース諸語すべてに言語接触が生じたわけではないと考えられる。そのため、どのグループの言語が、ツングース祖語における定動詞直説法の時制体系を保持しているか、どの言語グループが周辺言語から影響を受け、時制体系に変化が生じたか検討しなければならない。現段階での仮説を述べると、北ツングース諸語の定動詞直説法における非未来と未来の対立は、北ツングース諸語の分布地域やユカギール族との関係を考えると、ツングース祖語本来の時制体系である可能性が高い。次に、東ツングース諸語に関しては、モンゴル諸語に属するブリヤート語から直接影響を受けたとは考えに

くいが、モンゴル語からの影響は確かにあったと推定される（特にナーナイ語、風間 2010b 参照）。モンゴル語には、定動詞直説法の過去時制に 3 つの形式が見られ、証拠性による使い分けも観察される。本稿では、詳しく論じていないが、東ツングース諸語の定動詞直説法（特に過去時制）が直接体験した出来事を表す際に用いられる形式であるという点で共通している（注 11, 14, 15, 16 参照）。東ツングース諸語における定動詞過去形の形成とその用法は、モンゴル語からの影響によるかもしれない。最後に、南ツングース諸語の定動詞直説法の時制体系におけるモンゴル語、中国語との類似性については、これらの言語から影響を受けた結果であると考えられる[27]。もちろん、ツングース諸語のうち、以前上位言語であった満洲語からの影響も想定しなければならない。また、シベ語に関しては、周辺のチュルク諸語（ウイグル語、カザフ語）との接触も考えられる。但し、これらの仮説は、言語接触の方向性に関する現時点での推定にすぎないことを述べておきたい。一つの文法現象に注目し、言語接触の方向性を示すのではなく、多様な文法現象を総合的に考慮し、言語接触のプロセスを解明していきたい。

本研究は、以下の点において、限界がある。各ツングース諸語におけるすべての方言（特にエウェンキー語）について検討を行ったわけではない。また、言語によって定動詞直説法形式の使用頻度に顕著な相違が見られるため、定動詞直説法形式の使用頻度についても検討しなければならない。さらに、定動詞直説法の各時制における用法の比較・対照、定動詞直説法の各時制におけるアスペクトとの関連性、証拠性との関連性、形動詞の時制体系等についても考察が欠けている。また、周辺言語においては、モンゴル諸語のうち、その分布域が広いオイラト語（文語、新疆ウイグル自治区の方言、カルムイク語など）に関する検討が必要である。これらに関しては、今後の課題としたい。

[27] モンゴル語からの影響が強かったものの、南ツングース諸語の定動詞直説法には証拠性の用法がない理由に対し、筆者は次のように見ている。
①東ツングース諸語（オロチ語を除く）は、基本的に定動詞であるか形動詞であるかに関係なく、それぞれ過去、現在、未来時制の形式が存在する。一方、南ツングース諸語の動詞形式は、定動詞と形動詞がすべての時制に対立が存在するわけではなく、非過去時制は定動詞が、過去時制は形動詞が担うというように相互補完的に機能している。
②また、南ツングース諸語には定動詞過去時制が欠如していることも一つの要因であると考えられる。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person, 2nd person, 3rd person, CVB: converb, EXC: exclusive, INC: inchoative, IMPF: imperfective, INCL: inclusive, NMLZ: nominalizer, SG: singular, PL: plural, POL: politeness, PRS: present, PTCP: participle, -: suffix boundary, +: fusion, =: clitic boundary.

謝辞

筆者の思い込み、不正解な記述など、不備に満ちていた原稿だったが、査読の先生方による非常に正確かつ丁寧なご指摘とコメントのおかげで、大幅に修正できたこと、深くお礼を申し上げたい。もちろん、筆者の力不足で、すべてのご教示に対応できなかった点もすくなくない。本稿におけるいかなる誤りは、すべて筆者の責任に帰する。

参考文献

Avrorin, V. A. (2000) *Grammatika Man'chzhurskogo Pis'mennogo Jazyka*. Sankt-Peterburg: Nauka.

Benzing, J. (1955) *Die Tungusischen Sprachen: Versuch einer Vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden: Steiner.

Bulatova, Nadezhda and L. Grenoble (1999) *Evenki*. München/Newcastle: Lincom Europa.

Chao, Yuen Ren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.

Dwyer, Arienne (2016) Ordinary insubordination as transient discourse. Evans, Nicholas and H. Watanabe (eds.) *Insubordination* (Typological Studies in Language): 183-208. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Ebata, Fuyuki (2011) Sakha. Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*: 179-211. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

江畑冬生 (2020)『サハ語文法 統語的派生と言語類型論的特異性』東京：勉誠出版.

耿世民・李增祥 (1985)『哈萨克语简志』北京：民族出版社.

Girfanova, Albina H. (2002) *Udeghe*. München/Newcastle: Lincom Europa.

Gruzdeva, Ekaterina (1998) *Nivkh*. München/Newcastle: Lincom Europa.

胡增益・朝克 (1986)『鄂温克语简志』北京：民族出版社.

Hahn, Reinhard F. (1998) Uyghur. In Johanson, Lars and Csató, É va Á (eds.), *The Turkic Languages*: 379-396. London: Routledge.

Ikegami, Jiro (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. *Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969* in Berlin, 271-272. Berlin Akademie Verlag.

Ikegami, Jiro (2001) [1959] The verb inflection of Orok. 『ツングース語研究』24-72, 東京：汲古書院（初出：(1959) The verb inflection of Orok.『国語研究』9: 34- 73, 国学院大学国語研究会：東京）.

池上二良 (2001) [1971]「ツングース語の変遷」『ツングース語研究』397-445, 東京：汲古書院（初出：(1971)「ツングース語の変遷」『言語の系統と歴史』279-302, 岩波書店）.

Ikegami, Jiro (2001) [1992] The element *-n* in the indicative forms of verbs in Tungus languages.

Tsunguusugo Kenkyuu: 380-394. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: (1992) Proceedings of the *XXXII International Congress for Asian and North African Studies, Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Supplement IX, 1992: 195. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag).

池上二良 (2001)「ウイルタ語動詞活用大要」『環北太平洋の言語』157-166.

Janhunen, Juha (2005) *Khamnigan Mongol*. München: Lincom Europa.

風間伸次郎 (1996)「ヘジェン語の系統的位置について」『言語研究』109：117-139.

風間伸次郎 (2002)『ネギダル語テキストと文法概説』（ELPR publication series: A2-021, ツングース言語文化論集 19）吹田：大阪学院大学情報学部.

風間伸次郎 (2004)「ツングース諸語におけるⅢ群の形成について」『環北太平洋の言語』11：91-114.

風間伸次郎 (2010a)『ウデヘ語テキスト 6』（ツングース言語文化論集 47）府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎 (2010b)『ナーナイの民話と伝説 12』（ツングース言語文化論集 48）府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎 (2010c)『ウルチャロ承文芸原文集 5』（ツングース言語文化論集 49）府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kim, Juwon (2011) *A Grammar of Ewen*. Seoul: SNU PRESS.

Kolesnikova, V. D. and O. A. Konstantinova (1968) Negidal'skij Jazyk. *Mongol'skie, Tunguso-Man'chzhurskie i Jazyki*: 109-128. Skorik, P. R. (ed.) Leningrad: Nauka.

児倉徳和 (2007)「シベ語（満洲語口語）」中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く 2: フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』131-157. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kogura, Norikazu (2015) On the form and function of verbal suffix *-mi (-mbi)* in Sibe: Is it a vestige of subject agreement?. In *Proceedings of the 12th Seoul International Altaic Conference*: 23-34. The Altaic Society of Korea.

児倉徳和 (2018)『シベ語のモダリティの研究』東京：勉誠出版.

久保智之・児倉徳和・庄声 (2011)『2011（平成 23）年度言語研修シベ語テキスト 1 シベ語の基礎』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Li, Charles and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.

李林静 (2006)『ホジェン語の動詞構造』千葉：千葉大学大学院社会科学文化研究科博士論文.

李林静 (2014)「ホジェン語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』4: 111-126.

李树兰・仲谦编 (1986)『锡伯语简志』北京：民族出版社.

Liu, Meichun (2015) Tense and Aspect in Mandarin Chinese. Wang, William S-Y. and Chaofen Sun (eds.). *The Oxford Handbook of Chinese Linguistics*: 274-289. Oxford: Oxford University Press.

Malchukov, Andrej L. (1995) *Even.* München/Newcastle: Lincom Europa.

Nagasaki, Iku (2011) Kolyma Yukaghir. Yasuhiro Yamakoshi (ed.). *Grammatical Sketches from the Field*: 213-256. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Nedjalkov, Igor V. (1997) *Evenki.* London: Routledge.

Nedjalkov, Vladimir P. and G. A. Otaina (2013) *A Syntax of the Nivkh Language The Amur dialect.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

新田志穂 (2015)『現代ウイグル語の動詞形態論』岡山：岡山大学大学院社会文化科学研究科博士論文.

朴相澈 (2017) 만주어 문어의 시제와 양상 연구 —<滿文老檔>의 용례를 중심으로—. ソウル：ソウル大学校博士論文.

Pevnov, A.M. and M.M. Khasanova (2003) *Mify i Skazki Negidal'tsev* (ELPR publication series: A2-024). Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University

Poppe, N. (1960) *Buriat Grammar*. Bloomington: Indiana University.

Ramstedt, G. J. (1952) *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft II: Formenlehre* (Suomalais-ugrilaisen Seuran toimituksia 104), Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.

Sinor, D. (1949) Le verbe mandjou. *Bulletin de la Sociiti Linguistique de Paris* 45: 146-156.

Skribnik, E. (2003) Buryat. J. Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*: 102-128. London: Routledge.

菅原純 (2007)『2007 年度言語研修「現代ウイグル語」テキスト Éling, Éling!』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Sun, Chaofen (2006) *Chinese: A Linguistic Introduction.* Cambridge: Cambridge University Press.

Svantesson, Jan-Olof (2003) Khalkha. J. Janhunen (ed). *The Mongolic Languages*: 154-176. London: Routledge.

竹内和夫 (1991)『現代ウイグル語四週間』東京：大学書林.

Todaeva, B. X. (1985) *Jazyk Mongolov vnutrennej Mongolii Ocherk dialektov.* Moskva: Nauka.

Tsumagari, Toshiro. (1997) Linguistic diversity and national borders of Tungusic. Shoji, H. and Janhunen, J. eds. *Northern minority languages: problems of survival (Senri Ethnological Studies* No.44): 175-186. Suita: National Museum of Ethnology.

津曲敏郎 (2002)『満洲語入門 20 講』東京：大学書林.

Tsumagari, Toshiro (2003) Dagur. J. Janhunen (ed). *The Mongolic Languages*: 129-153. London: Routledge.

Yamakoshi, Yasuhiro (2011) Shinekhen Buryat. Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*: 137-177. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

山越康裕 (2012)『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社.

山越康裕 (2018)「シネヘン・ブリヤート語」李林静・山越康裕・児倉徳和（編）『中国北方危機言語のドキュメンテーション』205-249.

山田祥子 (2013)『ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究』【博士論文】札幌：北海道大学大学院文学研究科.

Yu, Wonsu (2011) *A Study of the Mongol Khamnigan Spoken in Northeastern Mongolia*. Seoul: Seoul National University Press.

赵相如・朱志宁 (1985)『维吾尔语简志』北京：民族出版社.

仲素纯 (1982)『达斡尔语简志』北京：民族出版社.

Tense System of the Finite Indicative Forms in Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics

Sangyub BAEK
(Muroran Institute of Technology)

Keywords: areal linguistics, Tungusic, finite indicative mood, tense system, language contact

The main objective of this paper is to examine the variation of tense system of finite indicative verb forms in Tungusic from the perspective of areal linguistics.

Based on previous studies regarding Tungusic and its adjacent languages, this study concentrates on tense system of finite indicative verb forms, which only function as sentence-final elements, contrary to participle verbs with multi-syntactic functions (i.e., nominal, adnominal and predicative functions).

Firstly, the opposition of non-future tense and future tense forms is commonly verified in Evenki, Even, and Negidal spoken in northern part of Russia. Secondly, the finite indicative verb forms in East Tungusic languages (Udihe, Nanay, Uilta), distributed in Amur River Basin, Primorsky Krai and Sakhalin Island, commonly retain 3 tense forms of present, past and future except Ulcha with present and future tense forms only. Thirdly, corresponding element of non-future (North Tungusic) or present (East Tungusic) tense form in South Tungusic languages (Solon, Hezhen, Manchu) in northeastern province of China universally serves as non-past tense marker, denoting present or future event, in addition to the common absence of inflectionally marked future tense form. It is noteworthy that the finite indicative verb forms *-mi* and *-maχei* in Sibe, spoken in Xinjiang Uyghur Autonomous Region, lack the category of tense, as they can be used in present, past and future event. In addition, it should be noted that the imperfective finite form *-maχei* is also confirmed in Sibe unlike other Tungusic languages. To sum up, the tense system of the finite indicative forms in Tungusic can be classified into 4 groups depending on the geographical distribution as follows: North Tungusic (Evenki, Even, Negidal—distinction of non-future and future), East Tungusic (Nanay, Uilta, Udihe—Past, Present, Future), South Tungusic 1 (Solon, Hezhen, Manchu—Non-past and absence of future tense marker exclusively employed for future event) and South 2 (Sibe—absence of tense category and existence of imperfective finite form)

Turning to neighboring languages, the opposition of non-future and future in Kolima Yukaghir shows a similarity to those of North Tungusic languages (Evenki, Even, Negidal). When it comes to Mongolic languages, Buryat retains 3 finite indicative forms to respectively encode present, past and future event, whereas Khalkha in Mongolia and Dagur and Xorcin in China commonly have non-past finite indicative elements and do not have any future-oriented tense marker, as in South Tungusic languages in northeastern

province of China. In Turkic languages, non-past forms in Kazakh and Uyghur on the territories of China are used to mark present or future event and future-oriented form is not confirmed in these Turkic languages. Moreover, it should be mentioned that *-maqta~-mäktä* in Uyghur is remarkably analogous to *-maχei* in Sibe, in morphological form and function as an imperfective finite marker, although they still have some disparities in some aspects. Lastly, the absence of tense category in Chinese (Mandarin) is consistent with those of the above-mentioned 2 finite indicative forms in Sibe.

In conclusion, the author raises a possibility that the tense system of finite indicative verb forms in Tungusic varies depending on the geographical distribution of each Tungusic language and this phenomenon may be attributed to an influence from genetically non-related neighboring languages.

（ベック・サンヤップ　iyairaykere@hotmail.co.jp）